

[翻訳]

H. H. ホウベン 『ゲーテのエッカーマン ある控え目な人間の伝記』(1)

林 久 博

序文

ヨーハン・ペーター・エッカーマンはゲーテの影響下で生き、我々の文学の最上の書物として定評のある『ゲーテとの対話』を出版した。ゲーテが価値を有する限り、エッカーマンはその行いによって不滅の存在となった人物である。しかし彼の名前はそうしたことを成し遂げた人間以上の意味を持つ。エッカーマンは巨匠でありマイスター師匠であり指導者であるゲーテという存在やその創作に対して恭しく控え目に、そして忠実で私欲のない献身を尽くしたことを表す一つ概念となったのであり、またその献身性を褒め称える表現となったのである。誰もが指導者になることはできない。しかし現在や未来においてその世界史的な使命を実現させるためにどんな指導者も、このような教え子を、援助者を、友人を必要とする。

この意味において、真に控えめな一人の人間の人生をドイツ国民に対して物語る事が私の本に課せられた使命である。エッカーマンの数奇な運命は本来の人間世界からゲーテへと至り、ゲーテ的な意味で何にでも生産的であろうとして再び世界へと突き進んでいく。今日、我々の祖国、とりわけ若きドイツに対して、未来は苦難に満ちた発展として待ち構え、それは全人生を賭すことを大胆にも要求してくる。その中であってこうしたエッカーマンの運命はまた、文学研究やゲーテ研究がこれまで学術的に気にも留めてこなかったことを考えるよう促してくる。——それはかつて裸足の少年であった、ルーエ河畔のヴィンゼンに住んでいたペーター少年のことである。彼はエルベ湿地で牛を放牧し、刈り入れが済んで地面が固くなった田畑で落ち穂拾いをしていた。仕事が終わって帰宅する時に女の子たちの歌声から聞き覚えた「あの山の上に」⁽¹⁾というお気に入りの歌が、ゲーテによるものだということを彼はまだ知らなかった。国務大臣として、そして有名な作家としてヴァイマルに君臨し、後にその教え子であり援助者であり友人であることが自分の人生の使命となったゲーテのことなど、まだ彼は知らなかった。

ベルリン、1934年5月1日、ドイツの労働の日に

ホウベン

1. 幼年時代

急行列車が轟音を立てながら通り過ぎていく。——ルーエ河畔のヴィンゼンで停車するのは、快速 普通列車だけで、リューネブルクを通り過ぎハンブルクへ向かう途中、この地に少しの間停車す

る。この小都市は駅から15分ほど離れている。というのも、90年前にレーアテ＝ハンブルク間で鉄道が敷設された際に、ヴィンゼンの人々は生活を転覆させてしまう数多くの刷新に激しく抵抗したからである。それは彼らの収入源となる船舶航行の衰退を恐れてのことであった。昔から食料品、家畜、煙草、毛織物、その他の小市民の勤勉の果実は、ルーエ川を下りイルメナウ川の下流を通ってエルベ川を經由し、ハンブルクへと運ばれた。抗議の結果、線路は可能な限り遠く離れた所に敷設された。線路の左側には乾いた^{ゲースト}高燥地、つまり砂だらけの荒地があり、線路の右側にある^{フォアゲースト}前高燥地はすぐに肥沃な^{マルシュ}湿地へと変わっていき、ゆっくりとエルベの流れから養分を受け取った。今ではヴィンゼンの人々はこうした無分別な行いに賛意を示すことはない。なぜなら鉄道と船舶は見事なまでの折り合いを見せていたからである。今と変わらず、茶色の高い帆を上げた船が新鮮な風を受けて白い雲の浮かぶ空を背景に自由に航行し、広く張り巡らされた堤防の間には草むらが鬱蒼と生い茂り、滅多に光がきらめくことはないのだが、川の流れは鈍い光を放ちながら帆船をゆっくりと北へ運んでいく。



図1：マテウス・メーリアン（1593-1650）によるヴィンゼンを描いた銅版画

この小都市そのものはその建造物から見る限り、1650年のメーリアンの有名な『地誌』の銅版画[図1]⁽²⁾にまだ完全に合致している。かつてドロテア・フォン・ブラウンシュヴァイク＝リュネブルク侯爵の居城であった城は、どっしりとした塔とそそり立つ壁によって自らを主張していた。この地を統治する教会は今では強大にそびえ立つ塔を備え、それが城の側面に向かっているため、見事なまでにお互いを補完し合うものとなっている。城の塔は土地の狭さに従うように直角に折れ曲がった一本の通りを見下ろしている。城から教会の傍らを通り過ぎてこの地を横断する菩提樹の並木道には木々が疎らに立っている。前面に長く伸びた建物が古い厩舎で、今では物置小屋やガラクタ置き場となっている。この厩舎は離れた所にあつたために火事から免れたが、町のそれ以外は度重なる大火事の犠牲となっていた。というのも、非常に狭い土地の中に細い道が曲がりくねって、まるで雷におびえる羊のように、家や小屋が不安気にひしめき合っていたからである。広々とひらけた城の背後を蛇行しながら流れるルーエ川にこの町は寄り添っている。川の流れからは大きな半円状の水路が引かれている。張り巡らされた水路はこの地の概略図の役割を果たしており、町の拡張に対して断固とし

た制約を加えることとなった。この水路は戦時中には要塞のように城の安全性を高め、また水夫や漁師にとって快適な連絡路として役立った。ルーエ川の対岸では定期的に洪水が起こるために、どんな形での移住も禁止されていた。

ヴィンゼンは今でもまだヨーハン・ペーター・エッカーマンが生まれた 1792 年のようである。槍のように尖った切妻屋根の似たり寄ったりの小さな家々の一つに彼の揺りかごもあった。そうした家の一階には扉の左右に部屋が二つあって、一方には貧しい所有者が住み、もう一方には暖房の効かない小部屋があるのみであった。上階は屋根裏部屋として用いられ、扉を開けて道路側から干し草と糞が梯子で上げられた。小窓がいくつかあったが、一時しのぎの光しか恵んでくれなかった。貧困がこの町を覆っていたので、近くのリューネブルクにあるような、居住用住居と倉庫を機能的に結びつけた上流階級の壮麗な邸宅を思い起こさせるものなど何もなかった。背の低い家々の群れの中にエッカーマンの生家は現存している。それはシュミーデ通りとルト通りがぶつかる道幅の広いシュー通りの中心部にある。以前は干し草置き場として使われていた上階が住居用に作り直され、階段が取り付けられている。一階にある二つの窓が戸口の代わりとなっている。今では隣家の方が当時の家の典型的な特徴をよく残している。

父親のヨーハン・アドルフ・エッカーマンは隣村からヴィンゼンへ引っ越して来て、旧姓ドロテア・シーアホルンと二回目の結婚をして暮らしていた。最初の結婚の時に生まれた二人の息子は船乗りとして広い世界へ旅立っていた。一人は行方不明となり、もう一人はグリーンランドへ捕鯨やアザラシ狩りに行き、ハンブルクへ帰った後そこで慎ましく暮らしていた。1792 年 9 月 21 日に生まれたヨーハン・ペーターは再婚した時にできた晩産の子であり、彼が 12 歳の頃には二人の姉は生家を離れて、そのままヴィンゼンやハンブルクに奉公に出ていた。この少年は年老いた両親の間で独り取り残されていた。かつて小商いをしていた父親は、年長の息子たちを無条件に信頼しすぎて彼らの放蕩により落ちぶれてしまっていたが、夏の間は背中に小さな箆笥を担いでリューネブルクの荒地を村から村へと歩き回り、木材、糸、小枝を売り歩いた。その際に父親は農婦たちからウールの靴下と交織物、つまり荒地産羊の茶色の毛と亜麻糸から織られた織物を買入れた。父親はこの二つを、エルベ川の向こう側の、もっとお金持ちの人々の住むフィアランデで売りさばいた。冬には未加工の羽ペンや鷺鳥ペン、それに晒していない亜麻布を買い、それらを荒地や湿地の村で買い占めては船でハンブルクへ運んだ。母親はその間、他人のために羊毛を紡いだり、服を仕立てたり、女性用の縁なし帽を縫った。しかしながらこの小家族を中心的に養っていたのは牝牛で、毎年仔牛を一匹生んではまるまると肥やしてくれ、時折数グロッシェンで牛乳が売れることもあった。一モルゲン⁽³⁾の土地でジャガイモと野菜を調達することもできた。しかしパンにするためのライ麦や食料にするための小麦は絶えず不足していた。

小さなペーターは働けるようになると家事や農作業を手伝わなければならなかった。春の訪れと共にエルベ川の水が引いてくると、土手に打ち上げられた葦を家畜小屋の敷き藁用に拾い集めなければならなかった。最初の緑が芽吹くと、牧草地で他の子どもたちと一緒に牝牛の番をした。夏には畑の耕作を手伝い、年がら年中一時間離れた最寄りの森まで行って薪を拾い集めた。薪の重さのせいでご

の虚弱な少年は汗を流し、息を切らせた。母親が何も料理するものがない時は釣竿を持って川辺に腰を下ろし、小魚を数匹家に持って帰った。軍隊が宿営することで家庭内での困窮が目立ってくるようになる時には特にそうしていた。穀物の収穫期には何週間もの間、落ち穂を拾うために刈り入れの済んだ田畑を裸足で歩き回った。袋がいっぱいになると上機嫌で家に急いだ。家には大きな樽があり、樽はパンを焼くのに十分になるまで日々の収穫を待っていた。秋風の中でドングリを拾い集め、それをメツツェ⁽⁴⁾単位で鷺鳥の餌用に売った。年頃になると彼は背中に荷物を背負って父親の行商に同行した。この頃が彼の最も素晴らしい青春時代の思い出の一つに数えられる。太陽の照りつける荒野はどれほど遠く果てしなく広がっていたことだろう。どれほど息苦しく淀んでいたことだろう。父親の少し後ろをついて歩いて行った少年を突然恐怖に陥れてしまうこともあっただろう！道はどれほど長かっただろう。荷物はどれほど重かっただろう！しかしペーターは次の村が視界に入ると駆け出して、父親が仕事に専念している間、鳥の巣を見つけようと生け垣や柵の辺りを探し回った。彼の鋭い眼差しから逃れることは容易ではなかった。彼は前回卵を見つけた巣の場所を忘れることもなかった。孵化した雛鳥の鳴き声を聞くと彼の心臓は喜びのあまり高鳴って、その場を立ち去る前からいつも自分の心と闘わなくてはならなかった。近くの枝にとまっていた親鳥が絶望した様子で不安気に周りを飛んでいるので、温かな羽毛を付けた雛鳥を手で覆って見せたりもするのだが、ゆっくりと歩き始めるのだった。自室で三羽の花鶏^{あとり}を育て、そのうちの一羽が逃げてしまった時は、どうしたら見つけ出せるかと夢の中で考えた。翌日には夢で見たようなこと全てがまさしくそのまま実現した。選り抜かれた彼のお気に入りはいろいろな種類のムシクイ、つまりコノドリムシクイやズグロムシクイなどで、それらの鳥が巣を作っている村には、思い出という地図帳に星印を付けた。彼は鳥を探すうちに情熱的な知識欲や生まれつきの観察の鋭さもあって、鳥の生態に関する並々ならぬ知識を獲得していった。その知識によって後に老ゲーテを驚かせ、何時間も楽しませることができた。

このような行商の日々の夕方には、父親と息子は宿泊したい村があると夕食に何を注文しようかとあれこれ考えるのだった。大抵は甘い牛乳とゼンメル、それにシロップの塗られた蕎麦粉パンケーキが選ばれた。父親は四角い自分のグラスにシロップを入れた。宿屋ではまず行商人たちの荷物が隅に積まれてから食事が注文された。のろのろした動きでおかみが台所でガタガタと物音を立てている間、二人は窓際の椅子に腰を下ろし、日中の重荷と暑さから解き放たれて体を休めた。ペーター少年はニシギの木材から彫り出されたスプーンを壁際のフックから取り外した。黄色で程よくすべすべしたそのスプーンを手にとって、待ちきれない様子でテーブルをカタカタ言わせた。そうこうするうちにこの店の主人や畑で下働きをしている農夫達や女中達もやって来て、見知らぬ二人に挨拶した。それぞれが自分のスプーンを持参して、二人の近くに腰を下ろした。農夫頭がナイフを出してパンを切り、女中が湯気の立ったオートミールとジャガイモ炒めを持って中に入ってきた。行商人と少年のためにまず温かい牛乳が差し出された。その牛乳の中に彼らはゼンメルをちぎって入れた。それから匂い発つ油によって茶色の輝きを放つパンケーキが出された。こうしてたっぴりと食事を取った後、女中が宿屋の部屋に新鮮な藁を使って寝床を用意した。父親がパイプをふかして寝床を分け合うことになる饒舌家やユダヤ商人と雑談しているうちに、ペーター少年は深い眠りにについていたのであった。

こうした放浪生活をしていれば夏には学校に通う時間は全くなく、冬にもほとんどその時間はなかった。教室の空気やじっと座っていることにペーターは我慢できなかった。彼は好きなだけ学校をさぼっていたが、14歳になるまでにはなんとか読み書きを覚えていた。両親や田舎の環境には馴染みのない物事を自分はどのようにして求めたらよいのだろうか。そのような精神的な人格形成の可能性について、彼は全く考えもしなかった。彼が感じていたのは、あらゆる困窮と苦難にもかかわらず、自分がこの人生において自然によって身をかかまわれているということであった。学校へ行くようにという厳格な強制が彼の青春時代の牧歌的生活を早い段階で破壊していたら、彼はきっと絶望していただろう。神への敬虔な信頼の中で彼は教育された。将来に渡り彼を落ち着かせたのは、7歳か8歳の時に見つけた一つの素晴らしい発見であった。その発見は彼の心に刻み込まれ、忘れることはなかった。「私はある晩のこと」と彼自身が述べている。「灯されたランプのもとで両親と一緒に食卓についていました。父はハンブルクから帰ってきたところで、商売の経過状況や進捗具合について話をしていました。父は煙草が好きだったので、一包みの煙草を持ち帰っていましたが、私の目の前のテーブルに置かれた煙草には紋章として一頭の馬が描かれていました。この馬が私にはとても上手な絵に見えました。羽ペンとインク、それに一枚の紙が折よく手元にあったので、これを模写してみたいという衝動を抑えきれなくなりました。父はハンブルクの話が続けていました。その間、私は両親に気付かれずに馬の絵を模写することに没頭していました。描き終えてみると私の模写はあたかも手本そっくりに思えて、これまで知らなかった幸福を味わったのでした。描いたものを両親に見せるとびっくりして、私のことを褒めずにはいられませんでした。その日の夜、私は嬉しくて興奮してしまい、ろくに眠れませんでした。この絵をもう一度目の前に手に取って楽しむのが待ち遠しくて、朝が来るのをじっと待っていました。」⁽⁵⁾

突如として目覚めた絵を描きたいという衝動は、それ以来二度と彼から離れなかった。白い漆喰を塗った家の壁に彼の絵が掛けられた。ある日のことペーターは近所の陶芸職人の家で、皿や鉢に彩色する際に手本にしていたデッサン用冊子を何冊か見つけた。親方が冊子を貸してくれるまで少年は粘った。ようやく冊子を手に入れると、彼は一枚一枚丁寧に花や鹿や男女の絵を描いた。こうして彼自身の手によって一冊のスケッチブックが出来上がったのだが、まさに印刷されたオリジナルのような出来栄だった。ある朝、税官吏の所で雇われている女中が牛乳を受け取りに来た時にこのスケッチブックを見て持ち帰り、自分の主人に見せた。この子どもの芸術作品を見て税官吏も驚いてしまった。それでこの税官吏は、そのスケッチブックをマイアー氏に渡したのである。彼はこの町で一番偉い役人で、上級領地管理官であり法律顧問官であった。

ここで二つ目の奇跡が起きた。数日後、城の召使いがやって来てこう言ったのだった。「エッカーマン夫人は直ちに息子とともに法律顧問官様の所に来てもらいたい!」。ペーターは行きたくなかった。あの大きくて薄暗い城に一度も行ったことがなかったし怖かったのである。母親は彼を落ち着かせ、髪をとかし、白い木綿の帽子を被せ、彼を引っ張って行った。歩くたびに反響する玄関ホールに二人が入り、きしむ音を立てる重い扉を開けて角石を敷き詰めた廊下に立っていた時にはもう辺りは薄暗かった。「今からどこへ行くの?」。ペーターは不安になって母親のスカートに身を隠した。すぐ

にでも帰りたかった。すると二人のいる暗い廊下の方へ、上品でほっそりとした若い女性が明かりを持ってやって来た。それは法律顧問官夫人のお付きの女性であった。この女性が二人を控えの間に招き、召使いに訪問を知らせよう命じた。そして、あのきれいな絵を描いたのがこの少年なのですか、と尋ねた。それから彼女はこの少年の前に屈んで彼の顔を照らし、繰り返し接吻した。このとてつもなく大きな建物に漂う暗闇、突然の光、高貴な女性、そしてこれまでに接したことのないようなこの女性の優しさ、そうしたものがペーターを困惑させ、全てを成り行きに任せた。召使いが二人にもっと近くに来よう促した。一人の品のある老人が親しげに彼らと向かい合った。手にはペーターのスケッチブックを持っていた。ではこの子があの小さな芸術家なのだな！と言ってペーターにあれこれ質問したが、ペーターは恐ろしくて一言も口が聞けなかった。標準ドイツ語を話すこんなにも高貴な人と彼はこれまで一度も関わりになったことがなかったのだ。——このような男性にペーターは慣れ親しんだ低地ドイツ語でどう返事をしたらよかったのだろう！母親は息子の愚鈍さに腹を立てたが、法律顧問官は彼女をなだめてこう言った。次の機会にはこの子ももっと信頼を寄せてくれるだろう、この子はスケッチブックを今日のうちに持って帰りたいたらうが、明日一人で私の所に来て受け取ってもらわないといけないよ。

ようやく外に出ることができて初めてペーターは我に返った。翌朝、母親はペーターを城へと送り出した。——またもやペーターは胸がドキドキしてほとんど挨拶もできなかった。しかしながら法律顧問官はとても親しげに話しかけてくれたので、最後には少しだけ打ち解けて話げできた。顧問官はこう述べた。画家になりたいかね？ペーターは画家がどういうものか分からなかったが、その気はなかった。顧問官はこう続けた。では学校が終わったら偉大な画家になれるようにハンブルクへ修業に行かせてあげよう、何かしら立派なものがお前から生まれてくるようにな。顧問官はペーターにスケッチブックを返し、きらきら光るグールドンを手に握らせた。これが意味することをペーターはよく分かっていた。「ひたすらまじめに描き続けるのだよ」、さらに「また近いうちに来なさい！」という言葉が聞こえてきた。彼は外に出るとグールドンを握り締めてまっしぐらに家へ向かって駆け出し、息を切らせて喜びに顔を輝かせながらお金を母親に渡した。お前を画家にしてあげよう、とペーターは歓声を上げた。顧問官がそう言ったんだよ——仕立て屋じゃなくてね！ペーターがそう言うのは、両親と知り合いの間で自分のことが話題に上がる時にはいつも、あの子は仕立て屋になるに違いない、だってちびなんだから、と言われていたからである。それを聞いてペーターはいつも憤慨していた⁽⁶⁾。仕立て屋の仕事を彼は嫌っていた。見習いは物差しで散々叩かれるからである。

画家って何？とペーターは質問した。両親は頭を横に振った。画家はね、壁や扉を色で塗るんだよ、大変な手仕事だよ！姉も大きな声を上げた。姉はハンブルクに奉公に出ている事情をよく知っていたのだ。画家たちはね、大きな家によじ登ったり下ったりしなくちゃいけないし、切妻屋根の上で仕事をしたり屋根にぶら下がってなくちゃいけないの、だから腕や足もたくさん折れちゃうんだよ、首さえもね、こんな危険な職人仕事で弱々しい少年が役立つことなんて最後の最後のことでしょね！ペーターの喜びは消え失せてしまった。——やめておきなさい、ペーターもきっと画家になんてなりたくないわ！母親はペーターを二度と法律顧問官の所へ送り届けなかったのだ、事情はまたこれま

でようになってしまった。つまり、仕立て屋へ修業に出すという選択肢が彼には待ち受けていたのだ！

日々の仕事と学校が許す範囲内で彼はできるだけ絵を描くことを好んだ。野原や森では紙や羽ペンを使って絵を描くことはできなかったが、柔らかい木材を使って、ちょっとした玩具だったり、通学用の荷物を引っ張る道具だったり、荷車を作ったりした。また学校の友人たちの何人かに凧を作って小銭を稼いだ。だが何か特別なことが確かに彼の身に起ころうとしていた。聖書に登場する多くの貧しい牧童たちにしても、強大な権力を持つ王や聖なる予言者になっていったのではないか。こうした予感の中で第三の驚くべき出来事が彼の心を強くしていくことになる。

「父が初めて私をハンブルクへ連れて行った時」と彼は語っている。「この大都市の狭くて華やかな街道には壮麗な建物が連なって、たくさんの人々で混雑していました。それら全てがこれまで見たこともないもので、とてつもない印象を私に与えました。ですから私は自分が無の存在であるように思えてしまい、ほとんど恐怖心のようなものが心に押し寄せてきました。私たちは人々がよく出入りする地下室に入って行き、私は父と離れてテーブルのベンチに腰掛けました。とても不安でした。特に私のことを愛してくれていると信じていた神様と心の中でたくさん話をするに慣れていくにつれ、私は神様に向き合い、私に分かるように合図を送ってほしい、私は神様とともにありたいのだし、だからこそ背を伸ばしてほしい、私を引き立ててほしい、とお願いしました。するとどうでしょう。そう考えて頭を上げると、見ず知らずの男が目の前に立っていました。彼は父の所へ来てこう話しかけてきました。『この子はあなたの息子さんか？ 私がそう言うのはね、この子は立派になるからだよ！』。父は微笑んで肩をすくめましたが、私は神様が合図を送ってくれたのだと感謝して、このことを心に留め、自信を強めたのでした。大都市にいても、もう恐怖に襲われることはありませんでした。」⁽⁷⁾

スケッチブックに始まるこの出来事の噂はやがてあちこちに広まり、ペーターの自信を強めていった。鳥の声に耳を澄まして観察に熱中していたのと同級生たちが邪魔してしまうので彼は人付き合いが好きではなかったのだが、今ではそうした以前の性格も改善されていった。しかしながら彼の内気さは克服しがたく、依然として残っていた。それ以外の点では彼が「みんなのお気に入り」⁽⁸⁾であることを、1817年にヴィンゼン大教区監督パリジウスが請け合っている。ペーターは14歳になる頃には学校に馴染むことができなくなっていた。学校の最終学年の終わり頃には比較的長期に渡って授業をさぼるようになり、その一方で賢い受け答えによって教師を驚かせることもあった。教師は彼を脇へ連れ出してこう言った。真面目に学校に通わないのは恥かしいことだよ、お父さんにも一度私の所へ来てもらおう、と。しかしそれは罰則を念頭に置いてのことではなかった。父親は教師の話聞いて大変驚いてしまった。マイアー法律顧問官と大教区監督が協力してあなたの息子さんが比較的長期に渡って学校教育を受けられるよう手配して下さいました、息子さんは今から個人授業を受けることとなります、この町の有能な子どもの何名かにフランス語、ラテン語、音楽の授業を受けさせるのです、服も用意されますし、身体的にもしっかり成長できるように大教区監督様は自宅で無料の食事も与えて下さいます、ですからお父様は職業を決めるまでもう二年間彼に時間を与えてほしいので

す！と。

このような有力な後援者を得て、両親はうまくノーと言うことができなかった。ペーターもこうした事態の変化に十分満足していた。ハンブルクの予言がその正しさを確認しようとしているかのようだった。この時から学校は彼にとって別の顔を持つことになった。彼は一心不乱に勉強し、特別の計らいによって与えられた二年間が終わった時には悲しくてならなかった。さらに勉強したい者は他所のギムナジウムに通わなければならなかった。だがそのためのお金はなかった。それどころか実家が困窮状態にあったので、すぐにでも働ける稼ぎ手が差し迫って必要とされていた。

2. 小役人 — それ以外には何もなれないのだろうか？

彼は一体どうなるのだろうか？ 農場労働者になるのだろうか？ 日雇い労働者になるのだろうか？ それとも職人になるのだろうか？ そのどれにも彼は役立たないのだった。1815年の医師の診断書には、彼が「子どもの時から虚弱体質で特に胸部が弱い」⁽⁹⁾ ことが記されている。では、まさか仕立て屋になるのだろうか？ すると堅信礼の直後に、彼に書記やその他のちょっとした事務を引き受けてほしいという司法官が現れたのだった。貧しい書記の青年からどうやったら偉大なものが生まれてくるのだろうか？ せいぜい何年か後に事務責任者になれるだろうが、それはヴィンゼンではかるうじて町の名士に数えられるくらいだ！ かと行って彼は、学校への従属を強いる教師たちから何も学んではいなかった！ だがこの提示された職があれば、彼はすぐにでも両親を支えることができるのだ。彼には選択肢はなかった。

この仕事は彼を明けても暮れても事務椅子に縛り付けていた。仕事に必要なのは字がきれいであることと正書法の知識くらいであった。両方とも彼は二年のうちに身に付けてしまい、文書作成もいくらか器用にこなせるようになっていた。韻文でさえ手がけてみた。ヴィンゼンの下級警官が貧乏人をいじめているのを目にした時、思わずそれを罵る詩を書いたこともあった。慣例的で型通りの法律文書が作成できるようになると、彼の雇い主は彼にも処理できるちょっとした弁護士の仕事を委ねたり、訴状を書かせたりした。その両方を一つの訴訟で任せることもあった。

その間に古いドイツ帝国はナポレオンの進軍によって崩壊していた。1714年以降、ハノーファーはイギリスとの同君連合によって一体化され、ハノーファー選帝侯は国王ジョージ三世としてロンドンに居城していた。1803年、フランスとイギリスの間で戦争が勃発すると、フランスはハノーファーを占領した。エッカーマンの故郷は他国の手に渡ってしまった。1805年12月、ナポレオンはハノーファーをプロイセンに割譲したのだが、1807年のティルジットの和約の後、この地は再びナポレオンに奪われてしまう。1810年1月、ハノーファーは部分的にはあるが、新しくできたヴェストファーレン王国に編入され、1810年12月にはハノーファーの北部分、並びにドイツ北海沿岸全てがフランス帝国へ併合された。ヴィンゼン行政区は解消された。エッカーマンはリューネブルクの「エルベ下流管区」^{ニーダーエルベ}の税務監督局で新しい仕事を見つけた。監督局は1811年初めには場所をユルツェンへ移されたが、3月末には同じく解消された。数々の人物が彼の優秀さを証明してくれた — 「自

分の能力を形成したい⁽¹⁰⁾ という彼の性格は特に称賛された — ので、ユルツェンの郡役所が彼を引き受けることになった。そこでも彼は能力を認められ、1812年末、アラール管区長官が彼を500フランケンの給与でベヴェンゼンの市長秘書へと昇格させた。エッカーマンの父は1811年に亡くなっていた。一番上の姉が日雇い労働者と結婚して実家を引き継ぐことになった。弟のエッカーマンは母のことだけ心配すればよかった。カントン・メール (Canton-Maire)⁽¹¹⁾、つまりベヴェンゼンの市長ロッホも秘書の「素晴らしい熱意」⁽¹²⁾ を褒め称えたので、このキャリアコースに乗っていれば、エッカーマンは運がよければいつかはハノーファーの小田舎の町長にでもなれただろう。

1813年春のことだった。ナポレオンの大軍隊がロシアの冬に屈し、皇帝は再びパリに舞い戻って来た。ナポレオンの残りの軍隊はコサック人たちに追撃されてドイツを横断しているところであった。3月16日、プロイセンはフランスに宣戦布告し、17日にフリードリヒ・ヴィルヘルム三世は国民に武器を取るよう呼びかけた。18日にはテッテンボルン率いるロシアの遊撃隊^{シュトライフコルプス}がハンブルクを解放した。1813年4月2日、リューネブルク近郊でフランスのモラン將軍と戦い勝利を収めると、それが解放戦争の幕開けとなった。こうした状況下で、エッカーマンをこれ以上事務室に引き留めておくことはできなかった。4月末に彼は辞職してヴィンゼンへ赴き、祖国の戦士の列に加わったのだった。役に立てるか立てないか、それは重要なことではなかった。— 銃を持てる腕であれば、どんな者でも喜んで迎えられた。夏の終わりに彼は義勇兵としてハノーファーのキールマンスエック伯爵の獵騎隊^{イーゲーコルプス}に入り、クノープ大尉の中隊に加わって、1813/14年の冬の遠征に従軍した。その遠征で彼はホルスタイン、メクレンブルクを通過して、5月末から再びフランス軍の手中にあったハンブルクの手前まで進んだのだった。何度も彼は戦闘に巻き込まれた。12月にはレンズブルクの手前でデンマーク軍との戦闘があり、ゼーシュテットやクロップ村近郊でも戦闘があったのだが、彼の中隊は敵からその村を奪い取ることに成功した。1814年2月には、ハンブルクの手前にあるヴィルヘルムスブルク島、およびラウエンブルク近郊でフランス軍との戦闘があった。ラウエンブルクでは彼は戦友たちと砦を攻略して敵をハーブルク城の前まで追撃した。彼は無傷だった。ひどい困難にあっても勇ましく耐え忍んだ。デンマーク軍を追って、彼の連隊は二週間もの間、すっかりぬかるんだ道をあちこち行軍したこともあった。「毎朝暗いうちに私たちは出発しました。」と彼は語っている。「一日中休むことなく、ほんのわずかな食料をもらうことさえなく行軍しました。夜の9時か10時に略奪された村で休憩し、野営のために納屋が私たちに割り当てられると幸運に思いました。そのような野営の際には、ちゃんとした食料にありつける幸運など滅多にありませんでしたし、もしあったとしても行軍によって疲弊しきっていたので、そんなことに構ってられず野営を優先させました。濡れた長靴と靴下を脱ぐと何も考えられず、身の回りの物を全部背負い、腕に小銃を抱えながら夜を過ごさなくてはなりませんでした。」⁽¹³⁾ 中隊がようやくデンマーク軍に追いついた日には19時間も行軍した。休戦協定が結ばれた後、彼の中隊はハノーファーへ戻ることになった。しかし帰り道は雪が5フィート⁽¹⁴⁾以上も降り積もり、ホルスタイン地方全体に及んでいた。ここでも兵士たちは苦勞して突き進んで行かなければならず、疲労のために雪の中で倒れてしまうこともあった。

ハンブルクを解放する試みが無駄に終わった後、兵団はメーゾン將軍を倒すためにライン川を越え

てオランダへと進軍せよという命令を受けた。そこには夏の終わりまでだったが、再び戦闘になることはなかった。仮兵舎にいる時はオランダの町を見て回る余裕があった。すると、エッカーマンには全く新しい世界が拓けてきた。フランドル地方やブラバント地方で、特にブリュッセルの教会や美術館で、彼は初めて本当の絵画を目にしたのだった。画家であるということがどういうことなのか、ようやく彼は理解した。任務から時間をひねり出すことができればいつでも、彼は偉大なオランダ人たちの傑作の前に立っていた。特にルーベンスに最も心を惹きつけられ、今まで予感したこともない幸福を感じた。しかし壮麗な広間で、自分よりも若い存命の芸術家の絵画を見ているうちに、彼は選択を誤った自らの人生を振り返り、泣きたくなるばかりであった。いつの間にか亡き人になっていたヴィンゼンのマイアー法律顧問官が自分をどうするつもりだったか、彼は思い出していたのだ！彼は子どもの時から自分の中に感じていた才能を開花させるために自己を磨くこともできなかつたし、味気ない日々の辛い仕事の中でほとんど忘れていたものへ向けて自己を高めていくこともできなかつた。その代わりに貴重な青春時代を事務室で無駄に過ごし、書類の写しを作ったり、命令書を 清書 したりしていたのだ！だが彼はまだ若く、取り逃してきたものを挽回できるのではないか？彼は長くは無駄に考え込んだりせず、すぐに行動に移した。トゥールネー、つまりベルギーのフラマン⁽¹⁵⁾都市であるドールニックで、彼は一人の若い画家と知り合いになった。この男は彼のために黒いチョークと特大の画用紙を調達してくれた。エッカーマンはそれを手にして美術館の絵の前に立ち、模写を始めた。彼には訓練とか指導といったものが欠けていたので、勤勉さと熱意でそれを補わなければならなかつたが、思った以上に人物の輪郭をうまく仕上げることができた。しかしスケッチに陰影をつけ始めようとしたところで進軍命令が下り、この楽しい仕事は中断となった。描けなかつたものを落ち着いた時に補えるように、彼は急いで影と光の濃淡の区分に一つ一つ文字で印を付けていった。それからその絵を巻いて堅い筒の中に入れ、小銃の隣に並べて背負い、トゥールネーからハーメルンまでの長い道のりを歩いた。彼は故郷に向かっていた。戦争が終わったのだ。ナポレオンはエルバ島に流刑となり、義勇兵団は解散となった。1814年9月21日、隊長のアンデルテン少佐は義勇兵エッカーマンに対して、彼が「一年間忠実かつ誠実に任務を果たし、全ての任務活動において絶えず称賛を受けた」⁽¹⁶⁾ という証明書を出している。また隊長はどの行政当局や軍当局に対しても「彼のことを何かにつけ好意的に扱ってほしい」と要請している。この親切な隊長は、エッカーマンが戦友たちと同じように早速昔の仕事に戻るだろうと考えていたのだ。だがエッカーマンはベヴェンゼンの市庁舎に復職を申し出ることはせず、母親の元へと帰った。彼は別の人生を歩む決意をしたのだった。(つづく)

本稿は H. H. Houben: *Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen.* Berlin / Wien / Leipzig (Paul Zsolnay) 1934 の序章、第 1 章、第 2 章を訳出したものである。

著者のハインリヒ・フーベルト・ハウベン (Heinrich Hubert Houben) について簡単に説明しておこう。1875 年 3 月 30 日アーヘン生まれ。デュッセルドルフでアビトゥーアを終えた後、ボン、ベルリン、及びグライフスヴァルトでドイツ文学、哲学、歴史を学ぶ。1898 年、『カール・グツコウの戯曲に関する研究』で学位取得。編集者、教師などを経て、文学史家、ジャーナリストとして活躍。青年ドイツ派の文学 (グツコウ、ラウベ、ハイネ) やゲーテの周辺人物に関する研究を多く残している。今回訳出した伝記はエッカーマン研究の際に必ず引用される重要文献である。これ以外にも *J. P. Eckermann, sein Leben für Goethe. Nach seinen neuaufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt* (1925) という著書があり、エッカーマンの日記や手紙が多数収録されている。1935 年 7 月 27 日ベルリンで死亡。(参照: https://de.wikipedia.org/wiki/Heinrich_Hubert_Houben [2019 年 11 月 25 日閲覧])

注: 以下の注は全て訳者によるものである。原書に注は付されていない。

- (1) 「あの山の上に」とは、ゲーテの詩「羊飼いの嘆きの歌」(1802 年) の冒頭部である。のちにシューベルトによって曲が付けられた。
- (2) [https://de.wikipedia.org/wiki/Winsen_\(Luhe\)#/media/Datei:Winsen_\(Merian\).jpg](https://de.wikipedia.org/wiki/Winsen_(Luhe)#/media/Datei:Winsen_(Merian).jpg) [2019 年 11 月 25 日閲覧]
- (3) モルゲンは昔の地積単位で約 30 アール。
- (4) メッツェは昔の穀類の計量単位。地方により異なる。
- (5) *Eckermann, Johann Peter: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832.* Hrsg. von Christoph Michel unter Mitwirkung von Hans Grütters. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag) 2011, S. 19f.
- (6) ちび と 仕立て屋 が結び付くのは、グリム童話の「勇ましいちびの仕立て屋」(KHM 20) と「賢いちびの仕立て屋」(KHM 114) が念頭にあるからだろう。
- (7) Houben, Heinrich Hubert: *J. P. Eckermann, sein Leben für Goethe. Nach seinen neuaufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt.* Teil 1. Hildesheim (Dr. H. A. Gerstenberg) 1975, S. 20f. [Reprint der Ausgabe Leipzig 1925] ハウベンはここで、『ゲーテとの対話』に収録されることになかったエッカーマン自身の原稿から引用している。そちらの方が彼の少年時代についてより詳しい記述があるからだろう。
- (8) Ebd. S. 19.
- (9) Ebd. S. 25.
- (10) Ebd. S. 22.
- (11) フランス語で *canton* は「小郡」、*maire* は「市長、区(町・村)長」を意味する。ベヴェンゼンは当時フランス占領下にあった。
- (12) Houben, S. 22.
- (13) Tewes, Friedrich: *Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß.* Bd. 1. Berlin (Georg Reimer) 1905, S. 229f. (<https://haab-digital.klassik-stiftung.de/viewer/object/1163339636/123/> [2019 年 11 月 25 日閲覧])
- (14) 1 フィートは約 30 cm。「5 フィート以上」だから、150 cm 以上の雪が降り積もっていたことになる。
- (15) フラマンとはフランスとベルギーにまたがるフランドル地方に住むゲルマン系住民のこと。言語はオランダ語の方言であるフラマン語。
- (16) Houben, S. 23.